

学習テーマ

③ 対句に着目して文を解釈しよう

漢文では、意味的・構造的に対応する二つの句を並べる対句の技法が用いられる。センター漢文以来、対句に着目すると容易に選択肢が絞れる問題は多い。傍線部を見る際には、前後に對の関係にある句を探そう。

④ 文と文の関係を見極めながら、論の展開を捉えよう

どんな文章にも主題があり、筆者はそれを、情理を尽くして説明しようとする。漢文に限らず、古文や英語でも「訳す」ことにはかり意識が向いてしまいがちだが、理路をたどって本文全体の趣旨をつかみたい。共通テスト初年度では論の展開を踏まえた問題が出題された。

問1 語句問題

(ア) 「厚生」は、「厚生」の語源である漢文の表現だ。「厚生労働省」「福利厚生」などと言うが、「厚生」の意は、「人々の生活を健康で豊かなものにする事」である。よって、「生活をまもり豊かにするもの」とある③が正解と判定できる。その他の選択肢は、①「満ちあふれた」、②「深くかわる」、④「利用できる」、⑤「促進してくれる」が、「厚」の字義に合わない。「厚くする」から「豊かにする」の意が生じているのである。

(イ) 「儉」は、「儉約」と言うように、「無駄遣いしないこと」の意である。傍線部は「不」が付いているので、「無駄遣いする」ということになる。よって、「つましい生活をしないで」とある③が正解と判定できる。自分が「儉」ではなく、貧しくなったのに、やはり天を怨む(貧及、亦怨之)という、傍線部に続く一節の文脈にも合致する。その他の選択肢は、(ア)と同じく「儉」の字義に合わない。

共通テスト小説で出題される語句問題では、「辞書的な意味を優先する」ことが鉄則であるが、漢文の語句問題でも同じだ。 選択肢の内容がどんなに文脈に合っているか、漢字そのものの意味(字義)からズレていたら正解にはならない。文脈を見る前に、漢字の意味を押さえることが肝心である。

ただし、漢字の意味が分からなかったら答えようがない。ふだんから漢和辞典を引いて、語源や熟語に接してほしい。

正解

ア＝③
イ＝③



問2 理由説明問題

傍線部の「民事天、其不仁至矣」が、3行目にある逆接の「然而」を挟んで、本文冒頭の「天之利下民、其仁至矣」と対になっていることを押さえよう。

天之利下民、其仁至矣

⇔

民事天、其不仁至矣

「天」による「利下民」の具体例として、続く一文で美味しいもの・便利なもの・生活を豊かにするものが挙げられている。このように何でも民に恵み与えているのだから、その仁は極まりないと言える（其仁至矣）。しかし（然而）、民は暑さや寒さに対して天を怨み、「不善」「不徳」といった自分のせいだ招いた禍いや貧窮についても天を怨む。だから、その不仁はきわまりない（其不仁至矣）ということである。よって、「民は何かにつけて天を非難するから」とある①が正解と判定できる。

②は「天の意向を無視する」が本文にナシ。③も「民が浪費するばかり」が本文にナシ。④は後半の「うらむ」は正しいが、その理由として挙げている前半の「天が暑さ寒さなどの試練を与えると」が誤り。⑤は、「禍がもたらされる」のは民の行いによるものであって、「天に対する民の奉仕が十分でない」からではない。

本問は、**対句に着目して解く問題**の一種と言える。傍線部の文言が対句の片方であり、意味的・構造的に対応するもう片方の句をヒントにして解く問題は、センター漢文から頻出であった。解法をしつかりと身につけてほしい。

正解

①

選択肢チエック

問2 傍線部A「民事天、其不仁至矣」とあるが、筆者はどのような理由でそう言っているのか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

「天之利下民、其仁至矣」

「怨之」

- ① 限らない恵みを受けながら、民は何かにつけて天を非難するから。
- ② 民が便利なものばかりを追い求め、天の意向を無視するから。
- ③ 天が与える恵みを、民が浪費するばかりで活用しようとしなから。
- ④ 天が暑さ寒さなどの試練を与えると、民はすぐそれをうらむから。
- ⑤ 天に対する民の奉仕が十分でなく、禍がもたらされるから。

問3 句法に関する問題

B 「尚」「況」の語が用いられていることから、④ 抑揚形であると分かる。抑揚とは、あることを強調するために、別のことを先に挙げておく表現法のことだ。強調したいことよりも些細なことを挙げ、「××だってゝなのだから」といったん下げて(抑)から、「○○だったらなおさらだ」と上げて(揚)強調する。「A尚B、況於C乎」という形をとり、「AすらなほB、いはんやCにおつてをや」と訓む。Cが強調したいことで、「AでさえBなのだから、ましてCはなおさらである」の意である。傍線部を解釈すると、「民は天のことさえこのように(如此) 怨むのだから、まして君主ならばなおさらである」となる。

C 「可」の送り仮名に「ケン」とあり、文末の終助詞「歟」と合わせて「(け)んや」と訓んでいるので、② 反語であると分かる。疑問と反語は文末の訓みかたで見分けよう。

未然形 + んや ↓ 反語
 終止形 + や ↓ 疑問
 連体形 + か ↓ 疑問

送り仮名に「ン」とあれば反語である。「可(〜べけんや)」はよく出てくる形なので、覚えておこう。「〜できるだろうか(いやできない)」の意である。傍線部では反語と「不」が重なっているので肯定となり、「慎まないでいられようか(いや慎まずにはいられない)」と解釈できる。

共通テスト漢文で句法の名称がダイレクトに問われる可能性は低いが、当然、解釈などの問題において句法の理解が求められる。『新・ゴロゴ漢文』を活用して句法の完全マスターを図ってほしい。

正解 B || ④ C || ②



問4 訓読に関する問題

傍線部中に二つある「之」の訓みがポイントだ。「之」には、動詞とつづ「ゆく」、指示代名詞とつづ「これ」、格助詞とつづ「の」とも訓む。①・②と、「の」と訓む③・④・⑤に分かれるが、「これ」だとすると、傍線部の前に指示するものがない。ここは格助詞で「者」にかかる(後)の「(者)と取るべきである。よって、③・④・⑤が残る。次に、二つめの「之」も、「堯・舜」と「行」という名詞どうしを結んでいるので、格助詞と捉えられる。よって、④が消去される。

残る③と⑤を見ると、「為」を③は「ためにす(ためにせざる)」と訓み、⑤は「なす(なさざる)」と訓む点異なるが、ここは文脈から判断しよう。堯・舜のような名君でさえ民から誇りを受ける。ならば、それに及ばない君主はひどい仕打ちを受けて一族が滅ぼされても不思議ではない(折而族之、不為甚矣)ということであるから、③では合わない。よって、⑤が正解と判定できる。

いま、「之」の訓みで選択肢を絞ってから文脈を参照したが、返り点や訓読が問われている問題では、**文脈に頼らない解き方**を徹底してほしい。文脈から判断しようとする、読み間違えたときに修正が利かなくなる。まずは傍線部にある句法や語を手がかりに考えよう。

正解 ⑤

選択肢チエック

どちらも格助詞「の」

問4 傍線部D「後^レ之^レ王^レ天下^一、有^レ不^レ為^二堯・舜^一之^レ行^一者^上」この読み方として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

- ① 後に ^xこれ天下に王となり、堯・舜の行くが為にせざる者有らば、
- ② 後に ^xこれ天下に王となり、堯・舜にこの行ひを為さしめざる者有らば、
- ③ 後の 天下に王たりて、堯・舜の行ひの為にせざる者有らば、
- ④ 後の 天下に王たりて、堯・舜に^xこれ行くことを為さざる者有らば、
- ⑤ 後の 天下に王たりて、堯・舜の行ひを為さざる者有らば、

文脈的に「為」を「ためにす」とは解釈できない



重要 問5 論の展開に関する問題

段落分け問題は、論の展開に沿って確実に切れるところと切れないところを見極め、そこから選択肢を絞っていくことが肝心だ。

まず、④は、問2で見たように、逆接の「然而」を挟んで天の「仁」と民の「不仁」がペアになっているから、切れることはない。このあたりは、現代文同様の論理的な読みが求められる。これに対して、⑥は、抑揚形を用いて天から君(君主)へと論を展開しているところなので、切れる。同様に、君から堯・舜へと話題が転換されている⑧も切れる。また、①も「嗚呼」と最後に筆者が感想を述べている部分なので切れる。

以上の通り、⑥・⑧・①で切れるので、正解は④と判定できる。

解答を踏まえて、論の展開を整理してみよう。

第1段落(⑥まで)……限らない恵みを与える天の仁は窮まりないが、何かにつけて天を怨む民の不仁も窮まりない。

第2段落(⑧まで)……天でさえ怨まれるのだから、君主は言行を慎まなければならない。

第3段落(①まで)……堯・舜もその慈孝を知らない民に怨まれた。

最終段落……堯・舜に劣る君主であれば、民が滅ぼしたとしても行き過ぎだとは言えない。

共通テスト初年度の第1問(評論)では、段落に沿って論の展開を整理する問題が出題された。漢文でも、ただ読むのではなく、筆者の理路をたどって読むことを心がけよう。

正解

④

問6 内容合致問題

前問で見たとおり論の展開を押さえれば、本文における筆者の主張が、君主としてあるべき態度を述べた第2段落にあることは明らかだろう。第1段落で天、第3段落で堯・舜さえ怨まれることを述べて、天下に皇帝たる、一国に君主たる者が言行を慎まないわけにはいかない（＝有帝天下、君一国者、可不慎歟）ことを強調したのである。

選択肢を見ると、②が「君主は自身の言行に常に心を配り」とこの趣旨を踏まえており、ズバリ正解と判定できる。①は「君主は慎み深い感謝の気持ちで民に教えるべきだ」、③は「君主は慎重に厳しく取り締まらなければならない」が誤り。ともに「慎む」の意味を取り違えている。④は天や堯・舜の「寛大さを手本とすべきだ」とする記述が本文にナシ。⑤は「民の中傷のもとになる欠点は、天や堯・舜の」ように偉大な存在にもあった」が誤り。天や堯・舜は欠点がないのに民から怨まれたのである。

正解 ②

学習アドバイス

共通テスト国語全体として、甲乙つけがたい微妙な選択肢が二つ残ったときに、いかにその違いを見極めて正誤を判定するかが、高得点を取るうえでカギを握る。問4のようなポイントの絞り方を、ぜひ参考にしてほしい。

第2講 解答欄

問6	問5	問4	問3	問2	問1
②	④	⑤	B ④ C ②	①	ア ③ イ ③
9	9	8		8	
			4 × 2 = 8		4 × 2 = 8

合格点
37点

50

書き下し文

天の下民を利するや、其の仁至れり。未だ味に美にして民の知らざる者、用に便にして民の由らざる者、生に厚くして民の求めざる者有らず。然而れども暑雨にも亦た之を恨み、祁寒にも亦た之を恨み、己善ならずして禍及ぶも亦た之を恨み、己儉ならずして貧及ぶも亦た之を恨む。是れ民の天に事ふるや、其の不仁至れり。天すら尚ほ此のごとし、況んや君に於てをや。是れ其の怨讐恨讎、天に徒倍せり。天下に帝たり、一国に君たる者有らば、慎まざるべけんや。故に堯にも不慈の毀り有り、舜にも不孝の謗り有り。殊に堯の慈は天下を被ふも、而も子に在らず、舜の孝は万世に及ぶも、乃ち父に在らざるを知らず。嗚呼、堯・舜は大聖なるも、民且つ之を誇る。後の天下に王たりて堯・舜の行ひを為さざる者有らば、則ち民は其の吭を扼へ、其の首を挫み、辱めて之を逐ひ、折きて之を族するも、甚だしと為さず。

現代語訳

天が民を利するにおいて、その仁は窮まりない。美味なるもので民が知らないもの、便利なもので民が用いないもの、生活をまもり豊かにするもので民が求めないものはない。しかし、炎暑に降る雨にも天を恨み、厳しい寒さにも天を恨み、自分の悪行のせいで禍いが及んでも天を恨み、自分の無駄遣いのせいで貧窮に及んでも天を恨む。このように民が天に仕えるにおいて、その不仁なること窮まりない。天ですら恨まれるのだから、君子はなおさらである。その恨みそしりは天に数倍する。天下に皇帝たる、一国に君主たる者であれば、どうして慎まずにいられようか（いや、慎まないわけにはいかない）。それゆえ堯にも慈愛がないというそしりがあり、舜にも孝心がないとのそしりがある。堯の慈愛は天下をおおうが、それは自分の子供に対してだけのものではなく、舜の孝心は万世に及ぶが、それは自分の父親に対してだけのものではないことを、民はことさらに知らない。ああ、堯・舜は大聖人であるが、民は彼らさえもそしる。その後の世に天下に王となり、堯・舜の行いをなさない者であれば、民はその喉をおさえ、首をつかみ、辱めて追放し、ひどい仕打ちをして一族を滅ぼしたとしても、それを行き過ぎだとは思わない。

重要語句

- 然而 慣用表現で「しかれども」と訓む。逆接で「しかし」の意。
- 堯・舜 『史記』―「五帝本紀」に描かれる、聖天子とされる伝説上の皇帝。
- 嗚呼 慣用表現で「ああ」と訓む。感嘆詞で、物事に感じて出す声のこと。